Rotary 世界に希望を生み出そう

Weekly Bulletin Vol.68 No.12　2023–2024　R I 会長 ゴードンR.マッキナリー　泉大津ロータリークラブ（創立1956.5.4）

週報 第3220回

会　長　上田　秀朗　　副会長　渡辺　万寿
幹　事　西田　佳郎　　ＳＡＡ　西端　政博

例会場　ホテルレイクアルスターアルザ泉大津
ＴＥＬ　0725-20-1121
例会日時　毎週金曜日 12：30 ～ 13：30

事務局　〒595-0062 泉大津市田中町10-7 泉大津商工会議所3F
TEL.0725-21-9500　FAX.0725-21-9501
メールアドレス　info@izumiotsu-rc.org
ホームページ　http://izumiotsu-rc.org

今週の例会（2023年10月6日）　第3220回

■ プログラム

卓話担当　小野寺　巧　会員
「今取り組んでいる地域活動」

■ 次週のプログラム

10月13日：卓話担当　杉本　憲一　会員
《卓話講師》野村證券株式会社　堺支店
支店長　辻本　泰祐　様

■ 今後の予定

・10月20日：卓話担当　砂原　孝史　会員
・10月27日：卓話担当　高寺　　壽　会員

■ 祝　誕生日

西端　政博（３日）

■ 今月のロータリーソング

手に手つないで

今月の歌

ふるさと

うさぎ追いし　かの山
小ぶな釣りし　かの川
夢は今も　めぐりて
忘れがたき　ふるさと

■ 先週の例会

幹事報告

西田 佳郎　幹事

○地区大会の登録料を、来月６日（金）に集めさせていただきますので、よろしくお願い致します。
○本日午後３時より、FMいずみおおつにて、吉村喜彦様と上田会長、細川理事がご出演されますので、お聞きいただければと思います。
○来週２９日（金）の例会は、定款第７条第１節の規定により、休会となっております。

委員会報告

なし

■ 出席報告　会員数44名　出席免除0名

月日	出席数	欠席	補充	出席率
9/22	37名	7名	―	84.09%
9/8	36名	8名	2名	86.36%

■ ビジター

なし

■ メークアップ

榎本（9/15 ワールド大阪ロータリーEクラブ）
原（正）（9/15 親睦活動委員会）

■ ニコニコ箱

・吉村先輩、本日はよろしくお願いします（上田）
・本日は公開例会にご参加頂きありがとうございます。作家　吉村喜彦様、本日卓話宜しくお願いいたします（西田）
・吉村様、本日の公開例会 宜しくお願いします（西端）
・吉村先生、よろしくお願いします（高寺）
・根尾先生、先週はありがとうございました。欠席のお詫び（櫻井）
・欠席の御詫びで御座居ます（釜野）
・欠席のおわび（川崎）

ニコニコ箱合計	15,000円
累計	210,000円

先週のプログラム ▶ 公開例会

《講師》作家　吉村　喜彦　様

吉村喜彦（よしむらのぶひこ）さまのプロフィール紹介

・1954年、泉大津市河原町（かわはらちょう）でお生まれになり。
・泉大津市立宇多小学校、誠風中学校を卒業されました。
・大阪府立三国丘高校卒業後、京都大学工学部に入学、その後、教育学部に転学しコミュニケーション論を専攻し、卒業されました。
・1979年４月、サントリー（株）入社。宣伝部に配属になり、輸入酒担当として、バーボンのソーダ割りキャンペーン、ジャック・ダニエルの広告を制作。ジャック・ダニエルの新聞広告は、朝日広告賞を受賞されました。
・1982年、広島支店に異動。福山担当になり、セールス活動をされました。
・1984年に宣伝部に復帰後は、ハーパー・ソーダのキャンペーンでバーボン・ブームを巻き起したり、テレビＣＭでは、井上陽水の「角瓶」、ミッキー・ロークの「リザーブ」、和久井映見とショーケンの「うまいんだな。これがっ」の「モルツ」などヒット作を連発されました。
・ジャック・ダニエルのテレビＣＭでは全日本シーエム放送連盟のＣＭグランプリを受賞されています。
・山崎、白州、響のいまのサントリーのメイン・ウイスキーは発売当初より、宣伝計画をたて、メディアミックスを考え、広告クリエイティブを制作されました。あの有名なフレーズ「何も足さない、何も引かない」の宣伝もその一つです。
・約18年間のサラリーマン生活の後、1997年１月に独立して、作家の道に進まれました。
・沖縄、海、漁師、バーのマスターをテーマにした小説やノンフィクション。ビール会社や洋酒メーカーの営業や宣伝を題材にした小説。東京や大阪のバーで繰り広げられる人間模様を描いた短編小説など。中でも吉村さんの小学生の思い出が詰まった我が街「泉大津」での出来事を描いたであろう「こぼん」は、この会場におられる多くの皆さんもお読みいただいたと思います。
・また、NHK-FM「音楽遊覧飛行～食と音楽で巡る地球の旅」の構成・選曲・DJをされたり、ラジオ番組にも数多く出演されるなど、多彩な活動を繰り広げられています。

「いのちの水を語る」

今日お話しするのは、「水の思想」についてであり、ロータリークラブの方は経営者の方も多いので役に立つと思っている。特に自分がサラリーマン時代にお酒にかかわる仕事をしており、特にウィスキーに関する思想や哲学の話をさせていただく。

僕は泉大津市の河原町の市営住宅で生まれた。大津川が近くにあり、それがどうも自分の人生を決定づけているのではないかと思っている。
僕が書いた「こぼん」というのを読んだ方はお分かりと思うが、小津という町で生まれた少年がデブでおねしょたれで、勉強はできるけど体育は全くできないような少年を主人公にした物語である。その少年が思春期になるまでの成長物語となっている。僕の小説の処女作で僕の体験がいくつか入っている。40歳くらいになった時に書いた小説で、やっぱり自分にとっては、水との付き合いが一番大きいのではないかと思って書いた。
おねしょをしてしかもデブ、夏になると水泳訓練があって、市役所の横のプールに先生に連れられて行って泳ぐ訓練をした。実は、僕の父親はオリンピックの水泳の選手で、日本大学の水泳部のキャプテンだったが、戦争の影響でオリンピックの開催が中止になり出場はできなかった。ところが、僕は小さいころから水が怖くて、当時、泉大津の浜で父親の背中にしがみつきながら海の中に入っていったが、水も海も怖くて息ができなくて泣き叫んでいた。優秀な父にして、全く運動のできない僕がいて、これはいったい何なんだろうと思いながら、小学校5年からの水泳訓練がまったく嫌で、好きな女の子の前で、泳げない自分をさらさなければいけない恥ずかしい思いをした。勉強ができても運動は何もできないコンプレックスを抱えた少年時代だった。
「こぼん」のなかでは、少年は沖縄に住むおじさんから泳ぎを習い、市民プールにも練習に行って、泳ぐということを学んでいった。小説の中では、泳げない人が泳げるようになる方法をきっちり書いた。「こぼん」で僕が一番言いたかったのは、水との付き合い方ということだった。水というのは力の掴みどころがない、力を入れると自分が沈む、浮かぶためには何かコツがあるように思う。そのコツを一回掴めば、ずっと泳いでいける。
僕は、父が優秀な水泳選手であったのに自分が水泳ができなかったことを周りからバカにされていたが、そうした中で泳ぎができるようになった時に何か自分の中で得たものがあった。多分、小説の中でこうしたことを言いたかったのだと思う。
僕の母親が東京生まれの東京育ちで家ではずっと東京弁だった。そして僕は内向的で家でずっと遊んでるタイプだった。漫画家になろうと思って絵ばかり描いていた。幼稚園に行くようになった時に初めて大阪弁というか泉大津の言葉に接した。だから幼稚園ではすごくいじめられた。そうするなかでだんだんと泉大津弁をしゃべるようになったが、家に帰ると母親に「何をそんな汚い言葉を使っているの？」と叱られた。外では泉大津弁をしゃべり、家では東京弁になる、自分の中に二つの自分がいて、全くこれは何なんだろう、すごくずるい奴なんじゃないか、と自分を思うようになった。
泉大津には、当時、在日コリアンの方、沖縄出身の方、奄美出身の方などがいて、いじめられる奴というのは自分より弱い存在を見つけてきてそいつをいじめる。僕も、仲間のうちでは弱い存在だったので、在日コリアンや沖縄・奄美出身の同級生などをいじめていたひどい奴だった。自分の中にあるコンプレックスと優越感に引き裂かれながら生きていく少年だったような気がする。そういう状況の中で、なんとか泳げるようにならないと俺はダメになるんじゃないかと思っていた。当時、僕は百科事典が好きだったので、百科事典で水泳のことを調べた。その中で学んだことは、まずは呼吸が大切であるということだった。そして水の中で目を開くということ。これらを実践していくことでやがて泳げるようになりだした。それと水の中では力を入れないということ。力を入れなければ浮くんだということが分かった。それと泳ぎは、水が泳がせてくれているんだということ。水をかくことにより、作用反作用の法則で、自分がかくことによって水が押し返してくれているんだということ。いろんなことを学んだ。こういうことが、水の思想のシンボリックなところだと思っている。

水は柔らかいもので不確かなものである。そして、水というものはバランスを取ってくれる。それとやがて分かったことだが、水に浮かぶということは、これは親鸞の他力と似ているのではないかと。お任せすることによって、自分が自由になる感覚を覚えた。
　僕が尊敬している思想家に老子という方がいる。その方の言葉に、上善如水（じょうぜんみずのごとし）や水は四角

い器にも丸い器にも従うというのがある。つまり水は自由である。また、孫子の言葉に、「兵の形は水に象る」というのがある。これも兵のフォーメーションも水のように自由にそしてスピーディーにとっていくことが大切という意味。要は、水は自由の象徴だと思っている。

次に僕の得意なお酒の話であるが・・・。

太陽系の中で、これだけ水のある惑星は地球だけである。その地球の中でようやく水を飲んでいるのは人間だけであり、お酒というのは優れて人間的な飲み物である。
人間的というところで言うと、お酒も人間も両義的であるということ。男と女といった相反するものが人間には必ずあり、お酒にも両義的な面がある。即ち、楽しい水にもなるし気違い水にもなるということ。そういう両義的なものは生きているうえで非常に大事なものである。これは哲学的に言う「アウフヘーベン」の思想にもつながっていると思う。

もう一つお酒で大事なものは何なのかというと、「ハレ」の飲み物であるということ。お酒は本来はお祭りなどの「ハレ」の飲みものなのに、近ごろは日常化していて「ケ」ナイズしている。そうすると、お酒は両義的で優れて人間的で断崖の上でどちらに転ぶかわからない快楽の部分での意味合いとかが薄れてきているのではないかと思っている。

サントリーで18年間いたなかで、毎日仕事でも飲んでいたら、お酒が「ケ」のものになってしまい、何のありがたみもなくなっていた。ただ単なる商売の道具になってしまう可能性もあった。しかし、本来的な意味でお酒というものはそういうものではないと思う。もともとお酒はある種のドラッグであるから日常的な覚醒した精神状況を飛ばせるもので、その飛ばしたところで神様とコミュニケーションするものだった。要は、神様と人を結ぶメディアとしてお酒があった。多分今はそれがほとんどなくなっている。

お酒の一番最初は、蜂蜜のお酒であった。蜂蜜が雨に当たって、それが太陽に照らされて発酵したものだったようだ。それからやがてメソポタミアでパンを作っていたが、余ってしまっておいていたものが雨に当たって、太陽に照らされて発酵して、ビールになった。このように自然に発酵してできたものであった。これらはアルコール度数はせいぜい18度から19度くらいまでしか上がらない。これは人間的なアルコール度数であった。

ウィスキーは、白鳥の首みたいな蒸留器で蒸留してできるお酒。大雑把に言って、醸造酒と蒸留酒の2種類がある。醸造酒は、ワイン、日本酒、ビールがある。ワインを蒸留したらブランデーになって、日本酒を蒸留したら米焼酎になって、ビールを蒸留したらウィスキーになる。蒸留をやると、アルコール度数が60度から70度くらいまで上がる。この蒸留という技術も紀元前3500年ごろにメソポタミアで生まれたようである。アリストテレスがワインを蒸留してブランデーを作っていたという話だ。この蒸留技術というのが中世の錬金術の中で使われた。
ワインを蒸留したらブランデーになるといったが、ワインはキリスト教の世界ではキリストの血といわれていて、スペシャルな存在である。それが蒸留して形は変わるが魂は一緒だと。それがいわゆるブランデーである。皆さんはお酒のことをよくスピリッツというが、ジンとウォッカとかこれは全部蒸留酒である。ウィスキーももちろん蒸留酒。人類がこの蒸留をするということを知って、初めて高いアルコール度数のお酒を造るようになった。そしてこれらを人はスピリッツ、即ち、魂の酒と言うようになった。
フランスのブランデーで「オードビー」というのがある。洋ナシとかサクランボとかを蒸留したもので、オードビーとは「いのちの水」という意味である。北欧のアクアビットというのも「いのちの水」という意味である。ウィスキーもアイルランドのケルトの言葉で「いのちの水」という意味である。これらはすべて蒸留酒である。
これらは人間の両義的な部分である「死」と「再生」という両方を持っていることが大事なのである。蒸留というのは一回ワインやビールを火にかけて殺して、それを冷やして元に戻して再生させているのである。即ち蒸留というのは。「死と再生の物語である」と、今日はこれだけを覚えて帰ってもらえればよいと思っている。

いのちの水とは、死と再生の飲み物である。最初に僕が、泳げないと僕の人生どうなるのかなと思った頃が僕の蒸留段階だったのだと思う。そこでいったん火にかけられて、形は変わったが僕という魂は残っている。
ウィスキーの話になるが、ウィスキーは実はコンプレックスの酒である。ボルドーワインに対してすごいコンプレックスを持っている。ボルドーワインは、アッサンブラージュしてブレンドして作る。ブルゴーニュはシングルモルトみたいなもので、ボルドーワインはブレンデッドである。ブレンディッドウィスキーは、ボルドーワインのようなブレンデッドな造りにしたいのである。
アッサンブラージュで一番成功しているのは、コニャック

である。いいコニャックというのは形が丸い。欠落がないのである。実は、響などのウィスキーも目指しているのも「まる」である。でも、ウィスキーはずっとコンプレックスを持っていて、どこか自分は欠けているなと思っている。実はそこがウィスキーの魅力である。どこか角があって、まるになり切れないそこがウィスキーの魅力である。

ブレンドの思想というのは「まる」の思想である。最初は角があるけど丸くなりましょう。それはブレンドの技であり、時間の技であり、気候の技でもあったりする。トータルとしてそれらが作用し、結果として丸くなればいいよねという、これはまさしく人間が生きていることとよく似ている。ウィスキーは混血であればあるほどおいしくて深みがある。
余談だが、レッドと響を混ぜるとどっちに傾くと思うか？これは響に傾く。美味しくなる方に傾く。人も良い人と出会ったら、良い人に傾くのである。深みのある人に出会うと深みのある人になっていく。
今日のテーマとして言えば、「交じり合えば美味しい」ということだ。

僕が大津川の川べりに生まれたその頃は、海や川の水も汚くて背骨の曲がったボラがいたが、最近では水もきれいになりそのようなことはなくなった。ただ、水がきれいになると大阪湾のちりめんじゃこも取れなくなったりで、きれいになればよいということでもない。水に栄養があるということときれいということは全く別の話。栄養というとこで言えば、川の話では、気水というのがある。海水と淡水が混ざるところ。だいたいおいしい魚はそこにいる。

僕はだいたい混ざり合ったところが好きで、僕の少年時代に戻ると、川べりに生まれて、いろんな友達に出会って、東京から来た僕みたいな人間、いろんなものが混ざり合ったところ、異質なものが一緒に存在していた、ちょっとハチャメチャだけどちょっとガラが悪いけど、だけど文化の肥やしみたいのものがある。そういうのがすごく大事だと思っている。異質なものをどうやって育んでいくかみたいなところ。それをマーケティングで作るのではなくて、自分たちの実感として作っていく。東京には、京成立石というところがあり、この下町に有名な呑んべぇ酒場というのがあったが駅前再開発で8月末に閉店になった。そのうちどこにでもある顔のない街になってしまう。そういう街が増えつつある。今日泉大津に来るときに泉大津駅のロータリーに羊の像があったのを見てすごく嬉しかった。残念だったのは、村雨の福板家さんがなくなっていたこと。昨日はGoogleMapで泉大津商店街の様子を確認したら、ずいぶんシャッターが下りていたが、立ち読みをした谷書店やコロッケを食べた西田のお肉屋さんがあって懐かしかった。こうした下町の良さと人間のぬくもりと差別があったにせよ、いじめっ子の顔が見えた。今の日本の街にしても人にしても、キャラクターはいい子ちゃんぶってて実は中身は悪いという、実につまらない状況になっている。泉大津に来て一番言いたかったことは、京成立石は顔がなくなる街になりそうになっているが、泉大津はどないするねん？泉大津はガラが悪くていいですよ。洋食焼きとかおばちゃんのタコ焼き屋とかも残してほしいし、だんじりも続けてほしい。今、日本人が一番必要としているのは、人間味。裏も表もあって当然だけど、それを卑怯でなく出しましょうよ！裏と表これはまさに気水。河口域は豊かな地域。水はきれいになったら魚が住まないので、栄養のある水、栄養のある泉大津になっていただければいいかなと思う。

以上

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、意義ある事業の基盤として奉仕の理想を奨励し、
これを育むことにある。
具体的には、次の各項を奨励することにある。

第１ 知り合いを広めることによって奉 仕の機会とすること。

第２ 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること。

第３ ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および 社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること。

第４ 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

四つのテスト

＝言動はこれに照らしてから＝

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか